

二〇二四年度 同朋大学 一般選抜1期(A方式) 国語 問題用紙

【注意事項】

- 一、試験開始の合図があるまで、問題用紙は開かないこと。
- 二、設問 現代文は共通問題である。全員解答すること。
- 三、設問 現代文と設問 古文は選択問題である。いずれか一方を選択し解答すること。
- 四、解答は、解答用紙に記入すること。
(設問 ・ 用、または、設問 ・ 用のいずれかを使用する。)
- 五、「始め」の合図とともに、解答用紙の所定欄に、受験番号と氏名を記入すること。

〈共通問題〉

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

私たちが言葉を使う目的の一つは情報伝達である。体験を言葉にして伝えることで、それを体験していない人にも「その体験がどのようなものであるか」が伝わるのだ。

たとえば、他人から「あそこに新しくできたラーメン屋は味噌ラーメン専門店だったよ」と聞けば、実際に行かなくても、その店に行けば味噌ラーメンが食べられる、豚骨ラーメンや醤油ラーメンは食べられない、と知ることができる。こうした情報は自分が何を食べるかを判断するための材料となるだろう。それを参考にすることで、ラーメンが食べたいときに「あの店に行ってみよう」と思えるし、ラーメンは食べたいけど味噌ラーメンの気分ではないときには「あの店ではない」と判断できるようになるのだ。

さらに、もしラーメン店について伝えてきた人が味に関して信頼できる人だったら、「おいしかった」「他では味わえない濃厚さ」（あるいは、「おいしくなかった」「どこにもあるような味だった」といった評価も参考にすることができる。その情報に基づいて、おいしいラーメンが食べたいならそこに行こう（または、あの店はおいしくないから避けよう）と判断できるのだ。

以上のように、I された他人の体験について知ること、自分では体験していない物事についての情報が得られ、その情報に基づいて自分の行動を決定することができる。私たちが言葉を使う目的の一つは、このようにして情報を共有し、行動のための材料を増やすことである。

A こうした目的は「赤」など幅のある言葉でも果たすことができる。たとえば、「新しく発表されたパソコンの色は赤だ

った」と聞いたとしよう。それを聞いただけでは、どういった色合いの赤なのかはわからない。だがそれでも、「緑だったら買おうと思っていたけど、赤ならやめとくか」と判断できる。同様に、「あの店のラーメンのスープはさっぱりしている」と聞いたら、具体的にどんな「さっぱり」なのかわからなくても、「今日はこつてりしたものを食べたいから別の店に行こう」と決めることができる。言葉による粗い区別の情報も判断材料になるのだ。

気をつけなければならないのは、言葉の目的は体験の代わりとなることではない、という点である。たとえば、「濃厚で、コクがあつて、口に入れてすぐコシヨウのにおいが鼻を抜け、後味の風味はすぐに消え……」というように言葉を重ね、特定の料理の味にしか当てはまらない表現ができたとしよう。その表現を耳にしたからといって、実際に味が感じられるわけではない。

II、言葉が体験の代わりにならないことは、言葉の欠点ではない。というのも言葉の役割は、その味を体験しに店に行くかどうかを決めるうえでの判断材料を与えることだからだ。III、その役割は先ほどの長い表現で十分果たせるだろう。

体験の代わりを言葉に求めるのは、言葉の目的を理解していない筋違いな願望なのである。

言語化によって得られる利益は、他人から判断材料をもらえるだけではない。これとは別に、言語化した本人にとっても利益となるものがある。それは、自分の体験を明確にする助けとなるというものだ。

例として、いま食べているカレーと先週食べたカレーの違いを比べる場合を考えてみよう。しかも、言葉を使わずに比較してみるとする。いま食べているカレーはまさに味がしているが、先週食べたカレーの味はいまはしない。先週のカレーはどうだっただろうか。それを思い出そうとするときに、再び口のなかに味が広がってくるわけではない。何かぼんやりとしたイメージは浮かんでくるかもしれないが、非常に頼りないように思われる。いまのカレーと何か違うとはわかつて、どう違うのかまではうまく理解できないだろう。さらに、先週食べたカレーと先々週また別の店で食べたカレーの違いとなると、違いはより(a)曖昧になってくる。

だが、言葉を使えば区別をつけるのは簡単だ。「いま食べているカレーは、ルーはサラサラして、しびれるような辛さ、ヨーグルトの酸味、玉ねぎの甘味が感じられる」「先週のカレーは、ルーはドロドロで、トマトの酸味が感じられ、最初はそこまで

辛くないのだが後を引く辛さがあつた」といったように、言葉にすれば違いが明確になる。さまざまな言葉が使えるようになると、その分だけ多くの区別がつけられるようになるのだ。

感じた味や香りを言葉にする作業は、ソムリエを目指す人が読む本ではよく(b)スイシヨウスィッシュウウされている。ソムリエはさまざまなワインの味や香りを記憶して区別する必要があり、その能力を養うためには、ワインを飲んだときに感じた香りや味をメモするのが良いそう。言葉にすることでさまざまなワインの違いを整理でき、また、メモを見返すことで「あのワインとこのワインが似ていると感じたのはこういう共通点があつたからなのか」といったことも発見できる。自分が感じた味の共通点や相違点を、より明確な根拠から理解できるようになるのだ。

以上のように、体験を言語化することで体験が明確になる。現在体験している味と過去に体験したさまざまな味の違いは、言葉による区別を利用して明らかにする。逆に、体験を言語化しないと、その体験が他の体験とどう違うのかもうまく理解できない。言語化は体験の特別さを奪うものではなく、特定の体験の特別さを(c)際立際たせてくれるものだと言えるだろう。

Bここで、判断材料と体験の明確化の違いをより明確にしておこう。確かに、自分の体験を明確にするための言語化によって、他人に判断材料を提供する表現が生まれる場合もある。先ほどの二つのカレーの説明は他人の参考になるもの。しかし、自分の体験の明確化が必ず他人の役に立つわけではない。というのも、他人に嫌な印象を与える言葉が使われる場合もあるからだ。

たとえば、ソーヴィニヨン・ブランという白ワインの香りは、よく**C**「猫のおしっこ」と表現される。その香りの主成分はメルカプトペンタノンという有機硫黄化合物であり、「アクの強い、グリーン感をともなつたような、長ネギの青い部分をつぶしたような、しつこいにおい」と言われる。他にも、ワインの味や香りについて解説した本を読むと、「腐葉土」「(d)ヌれた犬」「灯油」「汗」「ホコリ」「カビ」「スカンク」「タール」など、ぎよつとする言葉がいくつか見つかる。もちろん、「リンゴ」「レモン」「洋梨」「ナッツ」といった良い印象を与えるものもあるが、それだけではないのだ。

こういった悪い印象の言葉を初めて聞いた人は、飲食物の喩えにそれはどうなのかと（ ）をひそめるかもしれない。どのワインにしようか悩んでいるときに、ソムリエや店員から「このワインは猫のおしっこのような香りがします」と言われたらどうだろうか。そのワインがどんなに美味しく高く評価されていても、飲む気が(e)失せてしまうだろう。その言葉のせいで、おいしいワインを味わう機会が失われてしまうのだ。

では、なぜワインの香りを「猫のおしっこ」など嫌なものに喩えるのか。実際のところ、「猫のおしっこ」は(f)コウバイ客に向けた言葉ではないようだ。サントリーが運営するウェブサイトの「ワインの基礎知識」には、ソーヴィニヨン・ブランは「フレッシュな(g)柑橘とハーブのアロマの爽やか系」と表記されている。私の近所の酒屋にあったポップには「春の爽やかさを思わせる辛口白ワイン」と書かれていた。やはり、「猫のおしっこ」と書くと売れそうにないからだろう。ここからわかるのは、ワインの仕事に(h)タズサわる人にふさわしい言葉と、ワインを飲むだけの人にふさわしい言葉は違うということだ(同様に、ソムリエと(i)ジョウゾウ家も使う言葉が異なるという)。

どういう言葉が使われるかは、何を目的としているかに左右される。ワイン関連の仕事をする人たちのあいだで「猫のおしっこ」が(j)頻繁に使われる理由は、おそらく、いろいろなワインの味や香りを区別する必要があるからだ。それに応じて多くの言葉を使わなければならない、良い印象を与える言葉だけでは足りないのではないだろうか。

さらに、「猫のおしっこ」という喩えの簡潔さも利点となる。そもそも私たちが比喩を用いる理由の一つは、字義通りの言葉では説明が長くなってしまふものを簡潔に表すことである。もし「猫のおしっこ」という比喩を使わないでソーヴィニヨン・ブランの香りを表現すると、どうなるだろうか。まず、「猫のおしっこ」などの動物系の言葉は、強ければ不快だが、わずかな場合は深みや複雑さや熟成感を与える香りを指すために用いられているという。なかでも「猫のおしっこ」は(前述の通り)「アタの強い、グリーン感をともなったような、長ネギの青い部分をつぶしたような、しつこいにおい」とされている。しかし、ソーヴィニヨン・ブランの香りを話題にするたびに毎回こういった情報を説明するのは(1)が折れる。これに対し「猫のおしっこ」は、そうした長い情報を圧縮した簡潔な表現として使うことができるのだ。

さらに、簡潔にするだけでなく、嫌な言葉で簡潔にすることにも理由があると思われる。というのも、嫌な言葉は印象に残るからだ。ワインの味を「猫のおしっこ」という一見ぎよつとする言葉で表現すれば、それが強く記憶に残る。嫌な言葉を使うことにも、味の体験を明確に記憶に留めることができるという利点があるのだ。

味を言葉にする理由は（すべてではないが）おおよそ以上のように理解できるだろう。

（源河亨『美味しい』とは何か』による）

問一 波線部(b)「スイシヨウ」、(d)「ヌ」、(f)「コウバイ」、(h)「タズサ」、(i)「ジヨウゾウ」を、それぞれ漢字に直せ。

問二 波線部(a)「曖昧」、(c)「際」、(e)「失」、(g)「柑橘」、(j)「頻繁」の読みを、それぞれひらがなで答えよ。

問三 二重傍線部ア「()」をひそめる、「イ」()が折れる」を文脈に適した慣用句にするには、括弧内にそれぞれどのような文字をあてはめればよいか。適切な漢字一文字をそれぞれ答えよ。

問四

空欄

I

にあてはまる語として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 情報化
- 2 抽象化
- 3 具体化
- 4 言語化
- 5 断片化

問五

空欄

II

III

にあてはまる語として適当なものを、次の中から一つずつ選び、番号で答えよ(番号は重複できない)。

- 1 だが
- 2 そして
- 3 たとえば
- 4 なぜなら
- 5 つまり

問六

傍線部A「こうした目的は『赤』など幅のある言葉でも果たすことができる」とあるが、これに関連して述べた以下の文のうち、正しいものを一つ選び、番号で答えよ。

- 1 パソコンの色の場合、「赤」に「朱」や「紅」は含まれないため、具体的な色をイメージすることができる。
- 2 「赤」には「赤字」や「共産主義」等の色以外の意味があるため、「緑」や「青」よりも幅があると言える。
- 3 色を示す場合、「赤」という言葉から得られる情報の量は、「緑」や「青」からのそれよりもはるかに多い。
- 4 「赤」よりも「朱」や「紅」の方が具体的な色を指すことができるが、「朱」「紅」も幅のある言葉である。
- 5 「赤」の語が示す色には幅があるが、視覚による区別の方がより粗いので実物を見て確かめるのが良い。

問七

傍線部 B 「ここで、判断材料と体験の明確化の違いをより明確にしておこう」とあるが、筆者はその違いを示してどのようなことを言おうとしているのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 判断材料の提供という目的が体験の明確化に含まれることがあってもその逆はないということ。
- 2 判断材料の提供という目的の根底には、常に自分の体験の明確化という目的があるということ。
- 3 体験の明確化は主に自分のためであり、他人に判断材料を提供するためではないということ。
- 4 判断材料の提供と自分の体験の明確化の二つの目的は、互いを含み合う場合があるということ。
- 5 他人へ判断材料を提供することよりも体験を明確化することの方が高度な目的であるということ。

問八

傍線部 C 「猫のおしっこ」とあるが、ワインの香りを「猫のおしっこ」と表現する理由として不適切なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 いろいろなワインの味や香りを区別するためには多様な言葉が必要だから。
- 2 「アクの強い、グリーン感をとまったような、長ネギの青い部分をつぶしたような、しつこいにおい」といった長い説明を省略できるから。
- 3 「猫のおしっこ」は、飼っている人以外にはリアリティのない表現で、少量なら良い香りだから。
- 4 「猫のおしっこ」は、ワインの仕事に携わる人にはよく知られた表現だから。
- 5 飲食物を「猫のおしっこ」という嫌な言葉で表現することによって強く印象に残すことができるから。

問九 本文の内容と合致しているものを次の中から二つ選^レび、番号で答えよ。

- 1 「濃厚で、コクがあつて、口に入れてすぐコシヨウのにおいが鼻を抜け、後味の風味はすぐに消え……」のように、さまざまな言葉を列ねて説明すると体験自体が陳腐になり、体験の特別さを失ってしまう。
- 2 「ルーはサラサラして、しびれるような辛さ、ヨーグルトの酸味、玉ねぎの甘味が感じられる」のような具体的な説明は、他人のために役に立つかもしれないが表現した本人には役立たない。
- 3 「濃厚で、コクがあつて、口に入れてすぐコシヨウのにおいが鼻を抜け、後味の風味はすぐに消え……」のように、体験を言語化すると他との違いが明らかになり、体験がより理解できるようになる。
- 4 体験を記憶にとどめるためには、その体験を言語化する必要があるため、ワインの香りをあらわす「猫のおしっこ」という比喻表現は、ワインの専門家でなくても積極的に用いるべきである。
- 5 「濃厚で、コクがあつて、口に入れてすぐコシヨウのにおいが鼻を抜け、後味の風味はすぐに消え……」と書いても体験の完全な表現はできないので、他人に対しては「他では味わえない濃厚さ」と簡略に言うべきである。
- 6 「先週のカレーは、ルーはドロドロで、トマトの酸味が感じられ、最初はそこまで辛くないのだが後を引く辛さがあつた」のように書いても体験を完全に表現するのは困難だが、他の体験と区別することには意味がある。

〈選択問題〉

□ 次の文章は志賀直哉の小説『清兵衛と瓢箪』の全文である。これを読んで、後の問いに答えよ。

これは清兵衛という子どもと瓢箪との話である。この出来事以来清兵衛と瓢箪とは縁が切れてしまったが、間もなく清兵衛には瓢箪に代わる物ができた。それは絵を描くことで、彼はかつて瓢箪に熱中したように今はそれに熱中している……

清兵衛が時々瓢箪を買って来ることは両親も知っていた。三、四銭から十五銭ぐらいまでの皮つきの瓢箪を十ほども持っていたろう。彼はその口を切ることも種を出すことも独りで上手にやった。栓も自分で作った。最初茶渋で臭味をぬくと、それから父の飲みあました酒を貯えておいて、それで(a)頻りに磨いていた。

まったく清兵衛の(b)凝りようは激しかった。ある日彼はやはり瓢箪のことを考え考え浜通りを歩いていると、ふと、目に入った物がある。彼ははっとした。それは路端に浜を背にしてズラリと並んだ屋台店の一つから飛び出して来た皆さんのはげ頭であった。清兵衛はそれを瓢箪だと思ったのである。「りっぱな瓢じゃ。」こう思いながら彼は(c)暫く気がつかずにいた。――気がついて、さすがに自分で驚いた。その爺さんはいい色をしたはげ頭を振り立てて向こうの横町へ入って行った。A清兵衛は急におかしくなつて一人大きな声を出して笑った。堪らなくなつて笑いながら彼は半町ほど駆けた。それでもまだ笑いはずまらなかった。

これほどの凝りようだったから、彼は町を歩いていけば骨董屋でも八百屋でも荒物屋でも駄菓子屋でもまた専門にそれを売る家でも、およそ瓢箪を下げた店といえれば必ずその前に立ってじつと見た。

清兵衛は十二歳でまだ小学校に通っている。彼は学校から帰って来るとほかの子どもとも遊ばずに、一人よく町へ瓢箪を見に出かけた。そして、夜は茶の間の隅にあぐらをかいて瓢箪の手入れをしていた。手入れが済むと酒を入れて、手拭いで巻いて、缶にしまつて、それごと炬燵へ入れて、そして寝た。翌朝は起きるとすぐ彼は缶を開けてみる。瓢箪の肌はすっかり汗をかいている。彼は飽かずそれを眺めた。それから丁寧に糸をかけて日のあたる軒へ下げ、そして学校へ出かけて行つた。

清兵衛のいる町は商業地で船つき場で、市にはなつていたが、わりに小さな土地で二十分歩けば細長い市のその長い方が通りぬけられるくらいであつた。だからたとえ瓢箪を売る家はかなり多くあつたにしろ、ほとんど毎日それらを見歩いてゐる清兵衛には、恐らくすべての瓢箪は目を通されてゐたろう。

彼は古瓢にはあまり興味を持たなかつた。まだ口も切つてないような皮つきに興味を持つてゐた。しかも彼の持つてゐるのは、大方いわゆる瓢箪形の、わりに平凡な格好をした物ばかりであつた。

「子どもじゃけえ、瓢箪いうたら、こういうんでなかにやあ気に入らんもんと見えるけのう。」大工をしている彼の父を訪ねて来た客が、そばで清兵衛が熱心にそれを磨いてゐるのを見ながら、こう言つた。彼の父は、

「子どものくせに瓢いじりなぞをしおつて……。」とにがにがしように、そのほうを顧みた。

「清公。B そんなおもしろくないのばかり、えつと持つとつてもあかんぜ。もちつと奇抜なんを買わんかいな。」と客が言つた。清兵衛は、

「こういうがええんじや。」と答えてすましていた。

清兵衛の父と客との話は瓢箪のことになつていつた。

「この春の品評会に参考品で出ちよつた^{注1}馬琴の瓢箪というやつはすばらしいもんじやつたのう。」と清兵衛の父が言つた。

「えらい大けえ瓢じやつたけのう。」

「大けえし、だいぶ長かった。」

こんな話を聞きながら清兵衛は心で笑っていた。馬琴の瓢というのはそのときの評判な物ではあったが、彼はちよつと見ると、——馬琴という人間も何者だか知らなかったし——すぐくだらない物だと思つてその場を去つてしまった。

「あの瓢はわしにはおもしろうなかつた。かさばつとるだけじゃ。」彼はこう口を入れた。

Cそれを聴くと彼の父は目を丸くして怒つた。

「何じゃ。わかりもせんくせして、黙つとれ！」

清兵衛は黙つてしまった。

ある日清兵衛が裏通りを歩いていて、いつも見なれない場所に、^{注2}仕舞屋しむたやの格子先に婆さんが干し柿や蜜柑の店を出して、その背後の格子に二十ばかりの瓢箪を下げておくのを発見した。彼はすぐ、

「ちよつと、見せてつかあせえな。」と寄つて一つ一つ見た。中に一つ五寸ばかりで一見ごく普通な形をしたので、彼には震いつきたいほどにいいのがあった。

D彼は胸をどきどきさせて、

「これ何ぼかいな。」ときいてみた。婆さんは、

「ぼうさんじゃけえ、十銭にまけときやんしよう。」と答えた。彼は息をはずませながら、

「そしたら、きつと誰にも売らんといて、つかあせえのう。すぐ銭持つて来やんすけえ。」くどく、これを言つて走つて帰つて行つた。

間もなく、赤い顔をしてハアハア言いながら帰つて来ると、それを受け取つてまた走つて帰つて行つた。

彼はそれから、その瓢が離せなくなつた。学校へも持つて行くようになった。しまいには時間中でも机の下でそれを磨いていることがあつた。それを受け持ちの教員が見つけた。^{注3}修身の時間だつただけに教員はいつそう怒つた。

他所から来ている教員にはこの土地の人間が瓢箪などに興味を持つことが全体気に食わなかつたのである。この教員

は武士道を言うことの好きな男で、^{注4}雲右衛門が来れば、いつもは通りぬけるさえ恐れている新地の芝居小屋に四日の興行を三日聴きに行くくらいだから、生徒が運動場でそれを唄うことにはそれほど怒らなかったが、清兵衛の瓢箪では声を震わして怒ったのである。「どうして将来見込みのある人間ではない。」こんなことまで言った。そしてそのたんせいを凝らした瓢箪はその場で取り上げられてしまった。清兵衛は泣けもしなかった。

彼は青い顔をして家へ帰ると炬燵に入ってただぼんやりとしていた。

そこに本包みを抱えた教員が彼の父を訪ねてやって来た。清兵衛の父は仕事へ出て留守だった。

「こういうことは全体家庭で取り締まっていたらだくべきで……。」教員はこんなことを言って清兵衛の母に食ってかかった。母はただただ

E

清兵衛はその教員の

F

が急に恐ろしくなつて、唇を震わしながら部屋の隅で小さくなつていた。教員のすぐ後ろの柱には手入れのできた瓢箪がたくさん下げであつた。今気がつくか今気がつくかと清兵衛はヒヤヒヤしていた。

さんざん小言を並べた後、教員はとうとうその瓢箪には気がつかずに帰って行った。清兵衛はほっと息をついた。清兵衛の母は泣き出した。そしてダラダラとぐちっぽい小言を言い出した。

間もなく清兵衛の父は仕事場から帰って来た。で、その話を聞くと、急にそばにいた清兵衛を捕まえてさんざんになぐりつけた。清兵衛はここでも「将来とても見込みのないやつだ。」と言われた。「もう貴様のようなやつは出ていけ。」と言われた。

清兵衛の父はふと柱の瓢箪に気がつく^{注5}と、玄能を持って来てそれを一つ一つ割ってしまった。清兵衛はただ青くなつて黙っていた。

さて、教員は清兵衛から取り上げた瓢箪を^{注6}穢れた物でもあるかのように、捨てるように、年寄った学校の小使いにやってしまった。小使いはそれを持って帰って、くすぶつた小さな自分の部屋の柱へ下げておいた。

二か月ほどして小使いは僅かの金に困った時にふとその瓢箪をいくらでもいいから売ってやろうと思ひ立って、近所

の骨董屋へ持って行って見せた。

骨董屋はためつ、（ ）つ、それを見ていたが、**G**急に冷淡な顔をして小使いの前へ押しやると、

「五円やったらもうとこう。」と言った。

小使いは驚いた。が、賢い男だった。何食わぬ顔をして、

「五円じゃとても離し得やしえんのう。」と答えた。骨董屋は急に十円に上げた。小使いはそれでも承知しなかった。

結局五十円で (e)漸く骨董屋はそれを手に入れた。——小使いは教員からその人の四か月分の月給をただ貰ったような幸福を心ひそかに喜んだ。が、彼はそのことは教員にはもちろん、清兵衛にもしまいまでまったく知らん顔をしていた。だからその瓢箪の行方については誰も知る者がなかったのである。

しかしその賢い小使いも骨董屋がその瓢箪を地方の豪家に六百円で売りつけたことまでは想像もできなかった。

……清兵衛は今、絵を描くことに熱中している。これができた時に彼にはもう教員を怨む心も、十あまりの愛瓢を玄能で割ってしまった父を怨む心もなくなっていた。

しかし彼の父はもうそろそろ彼の絵を描くことにも小言を言い出してきた。

注1 馬琴…曲亭馬琴。江戸後期の戯作者。

注2 仕舞屋…商売をしていない普通の家。

注3 修身…旧制の小学校で、道徳教育を行うために設けられていた教科。

注4 雲右衛門…桃中軒雲右衛門。明治時代の浪曲師。武士道を鼓吹する勇壮な語りで人気を集めた。

注5 玄能…大型のかなづち。

注6 小使い…学校や官庁などで雑用に従事した人。

問一 波線部(a)「頻」、(b)「凝」、(c)「暫」、(d)「穢」、(e)「漸」の読みを、ひらがなで答えよ。

問二 二重傍線部「ためつ、()つ」が、「いろいろな角度から念入りに見ること」を意味する慣用表現になるように、()に適切な語をひらがな三文字で補え。

問三 傍線部A「清兵衛は急におかしくなつて一人大きな声を出して笑つた」とあるが、その理由として最も適当なもの、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 爺さんのはげ頭と同じ色つやの瓢箪があつたなら、さぞかし高く売れるだろうにと残念だったから。
- 2 爺さんのはげ頭を瓢箪と間違えるほど、瓢箪のことばかり考えている自分の滑稽さに気づいたから。
- 3 爺さんがまるで自分のはげ頭を自慢するかのようになり、頭を振り立てて行く素振りが珍妙だったから。
- 4 爺さんのはげ頭をうっかり瓢箪と勘違いしてしまったことの気まずさを、かき消そうと思つたから。
- 5 爺さんのはげ頭がりっぱな瓢箪に見間違えるほどのいい色だったことに、あらためて感心したから。

問四 傍線部B「そんなおもしろくないの」とは、具体的には何を指しているのか、本文中の語を用いて十五字以内で答えよ。

問五 傍線部C「それを聴くと彼の父は目を丸くして怒った」とあるが、ここから読みとることのできる清兵衛の父の

意識として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 ほかの子どもと遊ぶこともせず、瓢箪にばかり熱中している息子に対して、もっと子どもらしいことに興味を持ってほしいと願う意識。
- 2 せっかく客の好みに話を合わせて馬琴の瓢箪をほめたのに、それがわからず自分勝手に口をはさんできた息子の態度を苦々しく思う意識。
- 3 子ども将来のことを考え、しっかりと物事を理解しないまま、自分の思い込みだけで軽率に判断してしまうことを戒めようとする意識。
- 4 職人としての自らの審美眼に絶対的自信があり、その自負心が傷つくようなことは、たとえ相手が子どもであつても許せないという意識。
- 5 世間で評判になつてゐる有名なものこそ価値があると信じて疑わず、子どもにはそうした本当の価値がわからないのだと決めつける意識。

問六

傍線部D「彼は胸をどきどきさせて」とあるが、清兵衛が胸をどきどきさせた理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 父親から瓢箪の値打ちがわかっていないと非難されたことにより、自分が目をつけた瓢箪が本当にいいものかどうか、以前のような自信を失っていたから。
- 2 思いがけずいい瓢箪を見つけ、ぜひこの瓢箪を手に入れたいという気持ちが込み上げながらも、はたして自分に買えるほどの値段かどうか不安だったから。
- 3 婆さんが売っていた瓢箪は見るからにいいものだったため、自分が家にお金をとりに行っている間に、ほかの人が買ってしまおうのではないかと思ったから。
- 4 大人にも劣らないほど瓢箪を愛好しているといっても、それを知らない婆さんは、まだ子どもである自分に瓢箪を簡単には売ってくれない恐れがあったから。
- 5 すばらしい瓢箪を見つけて高ぶる気持ちをおさえ切れず、婆さんがその自分の気持ちを見透かして、高い値段をふっかけてくるかもしれないと疑ったから。

問七

空欄

E

にあてはまる語句として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 心配していた
- 2 驚嘆していた
- 3 興奮していた
- 4 恐縮していた
- 5 あきれていた

問八 空欄 F にあてはまる語句として適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 思慮深さ
- 2 用心深さ
- 3 慈悲深さ
- 4 嫉妬深さ
- 5 執念深さ

問九 傍線部 G 「急に冷淡な顔をして小使いの前へ押しやると」とあるが、このときの骨董屋の心情の説明として最も

適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 小使いが持ってきた瓢箪は、よく見るとたしかに上手に手入れされ、丁寧に磨かれてはいるが、もともとの形が平凡でおもしろみがないため、よほどの物好きでなければ買ってくれる人はいないだろうと思っている。
- 2 小使いの持ってきた瓢箪が、めったに世の中に出まわることのないような上等のものであったために、もしかするとこの小使いは、何らかの不正な手段でこの瓢箪を手に入れたのではないかといぶかしく思っている。
- 3 小使いの持ってきた瓢箪がどれほどの価値があるものなのかはよくわからなかったものの、とりあえずいくらかの金を払って手に入れておけば、いずれは瓢箪好きの客にそれなりの値段で売れるだろうと思っている。
- 4 小使いの持ってきた瓢箪が非常にすばらしいものであり、高額で取り引きされるであろうことを確信しているものの、そのことを小使いに気づかれないようにして、なるべく安い値段で買い取りたいと思っている。
- 5 小使いの持ってきた瓢箪は形といい色といい申し分のないものではあったが、最近手入れをされた様子がまったくなく、もとのつやを取り戻すためにはかなりの手間をかけて磨く必要があることを残念に思っている。

問十 次の1～5の中から、志賀直哉の作品を一つ選び、番号で答えよ。

1 暗夜行路

2 雪国

3 斜陽

4 羅生門

5 破戒

〈選択問題〉

〔三〕次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、唐もつしに莊子といふ人ありけり。家いみじう貧しくて、今日の食物絶えぬ。隣に監河侯といふ人ありけり。それがもとへ今日食ふべき料の粟を乞ふ。

河侯が曰く、「**A**今日ありておはせよ。千両の金を得んとす。それを奉らん。いかでか(a)やんやんことなき人にに、今日(b)参るばかりの粟をば奉らん。返す返す**B**おのが恥なるべし」といへば、莊子の曰く、「昨日道をまかりしに、あとに呼ばふ声あり。顧りみれば人なし。ただ車の輪跡のくぼみたる所にたまりたる少水に、鮒一つふためく。何ぞの鮒にかあらんと思ひて、寄りて見れば、**C**少しばかりの水に、いみじう大きな鮒あり。『何ぞの鮒ぞ』と問へば、鮒の曰く、『我は河伯神の使ひに、江湖へ行くなり。それが飛びそこなひて、この溝に落ち入りたるなり。喉乾き死なんとす。我を助けよと思ひて、呼びつるなり』といふ。答へて曰く、『吾、今二三日ありて、江湖といふ所に遊びしに行かんとす。そこにもて行きて放さん』といふに、魚の曰く、『さらにそれまで(c)え待まつつまじ。ただ今日一提ひきばかりの水をもて、喉をうるへよ』といひアしかば、さてなん助けイし。鮒のいひし事、我が身に知りぬ。(d)さらに**D**今日の命、物食はずは生くべからず。後の千の金さらに益なし」とぞいひける。

Eそれより、「後の千金」といふ事、名誉せり。

(『宇治拾遺物語』による)

問一 点線部(a)「やんごとなき人」、(b)「参る」、(c)「え待つまじ」、(d)「さらに」の本文中における意味として最も適当なものを、それぞれの選択肢の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

(a) 「やんごとなき人」

- 1 裕福な人 2 無視できない人 3 心優しい人 4 貧しい人 5 尊ぶべき人

(b) 「参る」

- 1 献上する 2 手元に届く 3 お持ちする 4 召し上がる 5 残っている

(c) 「え待つまじ」

- 1 待たないだろう 2 待ってはいけない 3 待てないだろう
4 待てるだろう 5 待っていたい

(d) 「さらに」

- 1 まったく 2 そのうえ 3 ますます 4 いくつこうに 5 なによりも

問二 二重傍線部ア「しか」、イ「し」の活用形は何か。適当なものを、次の中から一つずつ選び、番号で答えよ。

- 1 未然形 2 連用形 3 終止形 4 連体形 5 已然形 6 命令形

問三 傍線部A「今五日ありておはせよ。千両の金を得んとす」はどのような意味か。最も適当なものを、次の中から

一つ選び、番号で答えよ。

- 1 今日(けふ)は五日(ごにち)でござ(ご)いますよ。あなた(あなた)は千両(せんりょう)の金(かね)を得(と)るでし(し)ょう。
- 2 今日(けふ)は五日(ごにち)でござ(ご)いますよ。私(わたし)は千両(せんりょう)の金(かね)を得(と)るでし(し)ょう。
- 3 五日(ごにち)後(ご)にいら(い)っし(し)ゃい。あなた(あなた)は千両(せんりょう)の金(かね)を得(と)るでし(し)ょう。
- 4 五日(ごにち)後(ご)にいら(い)っし(し)ゃい。私(わたし)は千両(せんりょう)の金(かね)を得(と)るでし(し)ょう。
- 5 あと五日(ごにち)お待(まち)ちなさい。あなた(あなた)は千両(せんりょう)の金(かね)を得(と)るでし(し)ょう。

問四

傍線部B「おのが恥(は)なるべし」とあるが、監河侯(かんがこう)はどのようなことを恥(は)ずかしいと言(い)っているのか。最も適当(てきとう)なもの(もの)を、次(つぎ)の中(なか)から一つ選(えら)び、番(ばん)号(ごう)で答(こた)えよ。

- 1 莊子(じょうし)が監河侯(かんがこう)に僅(わずか)かな粟(あわ)を乞(こ)うたこと。
- 2 監河侯(かんがこう)が莊子(じょうし)に僅(わずか)かな粟(あわ)を渡(わた)すこと。
- 3 莊子(じょうし)が監河侯(かんがこう)から大金(おほき)を受(う)け取(と)ること。
- 4 監河侯(かんがこう)が莊子(じょうし)から粟(あわ)を返(かへ)されること。
- 5 莊子(じょうし)が監河侯(かんがこう)に粟(あわ)の返(かへ)礼(れい)をす(す)ること。

問五 傍線部C「少しばかりの水に、いみじう大きな鮒あり」とあるが、鮒がそこにいた理由として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 河伯神の使いとして大きくなった姿を莊子に見せようとしたから。
- 2 その少量の水のある溝は、鮒の目指す江湖に繋がる近道だから。
- 3 鮒は江湖に行くつもりだったが、飛びそこなってしまったから。
- 4 喉が乾いていたために鮒自身がその溝の水を飲んでしまったから。
- 5 鮒は河伯神の使いで、貧しい莊子を助けたいと思っていたから。

問六 傍線部D「今日の命」とあるが、(1)鯉にとって「今日の命」を救うものは何か。(2)莊子にとって「今日の命」を救うものは何か。本文中から適切な語句を、それぞれ五十字で抜き出せ。

問七 傍線部E「それより、『後の千金』といふ事、名誉せり」とあるが、「後の千金」ということわざの意味として最も適当なものを、次の中から一つ選び、番号で答えよ。

- 1 大きな援助は当人のためにならないのでするべきでない。
- 2 援助を受けたときには十分な返礼をするべきである。
- 3 援助はその大小よりもいつ行うかの方が重要である。

- 4 当初は小さな援助でも徐々にその恩恵は増すものだ。
- 5 援助を受けたいのであれば事前の手配が必要である。